

沖

俳句雑誌[おき]

5月号

沖 発行所,

只人

能村 研三

完全退職

三月で公務の仕事を完全退職した。役所は四年前に三十六年間勤めて退職し、その後財団で三年間、そして再び市の文学ミュージアムで立ち上げの年の一年間をお手伝いした。文学ミュージアムは現役時代から私が強く関わって開館にこぎつけたので、公務最後としてはやりがいのある仕事であった。あと一年は制度としては働けることになっていたが、かねてから専門俳人になることを夢見ていたので、ここで思い切って公務から完全に退くこととした。卒業後民間に勤めたこともあったが、役所関係はちょうど通算四十年勤めたことになる。父登四郎も市川学園には六十五まで四十年勤めたのでびつたり同じ計算になる。

四月からいよいよ所謂「毎日が日曜日」の生活が始まったのだが、私の場合には通常とはちよつと勝手が違う。というのも週末の土曜日曜は殆ど俳句の用が入っているからだ。し

啓 蟄 や 馴 染 し 靴 の 不 恰 好

か さ ば り し 帽 子 の 箱 や 桜 冷

幾 筋 の 山 巒 消 え し 穀 雨 かな

土 嚙 ん で 春 田 起 し の 鋤 使 ひ

春 三 日 月 退 職 の 荷 は 軽 く あ り

職 辞 し て 只 人 と し て 青 き 踏 む

東京駅吟行

正 面 の 御 車 寄 せ に 緑 立 つ

春 真 昼 辰 野 ド ー ム の 半 球 形

春 愁 や 発 着 列 車 き り も な や

春 日 差 す 八 角 屋 根 の う ろ こ 葺

かも毎朝遅くまで寝ている気になれない。朝は五時前に目が覚めてしまい、朝風呂に入ってから机に向かい原稿書きの毎日とは勤めている時と同じだが、出勤時間というタイムアウトが無いのがうれしい。毎日「定刻に出勤」のプレッシャーが無くなったことは事実だ。

今まで待つていたでいている句集の序文、俳人協会から出すことになって自註句集の執筆、そして伸び伸びになっていた第七句集の刊行、さらに書庫の整理とやる仕事は山積みされている。貧乏性のせいなのか、回遊魚的な習性なのか、絶えず動いていないと落ち着かないのかも知れない。

まだ十日あまりなので、どのような時間の使い方がベストなのか、もう少し考えなくてはいけないが、「沖」の地方支部を訪ねることや、今まで十分なお手伝いが出来なかった俳人協会の仕事などにも時間を使っていきたい。

蒼茫集



一年生

安居正浩

終電といふ春愁の捨てどころ
許す目を持ちても雛の向き合はず
春の雪浮気ごころのやうに降る
もぞもぞとまだもぞもぞと春眠し
近くても遠足小学一年生
ほろほろとこぼれてこそ雛あられ

こころ

北川英子

国盗りのあれよあれよと春一番
雛の間に亡き姉ら来て若々し
革新を積みての伝統三鬼の忌
鳥を見て飛び花見て咲かす心
お互ひに相手気遣ふおぼろの夜
姉の忌が桜近江へ誘へり

海鳴り

上谷昌憲

海鳴りを曳き摺るやうに若布干す
春北斗どこか目減りをしてぬか
雪しまく本郷は坂多き町
雪兎蔵して溶ける小かまくら
春はあけぼのヒレカツの切口も
一畝はお多福豆の花ざかり

蜃気楼

樋口英子

石の向き変へるや走る春の水
菱餅は知的な形してあたり
老ゆるとは母に似ること桜の芽
果実酒の封印を解く雛納
日向ぼこひとりのときは雲を見て
人いつかこの世追はるる蜃気楼

詩の欠片 菅谷たけし

雪晴といふ太陽の上機嫌
雑木の芽濡るる狐の嫁入りや
水蹴つて水を剥がるる小白鳥
春宵や2Bで書く詩のかげら
地球儀のふんはり浮かぶ遅日かな
掴む者ぬぬ吊皮も春愁ひ

白湯光り 千田 敬

胸中に昭和の水脈山笑ふ
沖よりも眼前の雲丹見てゐたり
春の風邪白湯の光も呑みほせり
啓蟄の首より吊す身分証
現し世の端に頑張る大朝寝
電線のごと管貼りつけて春一番

まぼろしの手 辻美奈子

アボカドの種の重たし春の月
花の夜耳のみ覚めてけものは

ふらここに錆の匂へる夜明かな
惚の芽を搔くまぼろしの手が伸びて
生ハムが麴麩をはみ出す春愁
ゆつくりと大人になれとふきのたう

水の厚み 吉田政江

鷹鳩と化す親切のすれ違ひ
正体の見えぬを恐れ町臈
陽炎の真ん中割つて来る銀輪
末黒蘆水の厚みの隠れけり
山笑ふいつむうななと土竜塚
雛の間に入つたきりの寝息かな

ようそろ 甲州千草

カーテンの満帆梅の風ようそろ
青き踏むときをり山羊の声入れて
春泥を跳ばむ生れ日なればこそ
たつぷりと桃の節句の豆サラダ
春愁や人の動きに光る塵
春眠のなみだこめかみ素通りす

うぬぼれ鏡

千田百里

春は曙光源氏の去ぬるころ
蝌蚪になる夢見て覚めて手足あり
鷹鳩と化してうぬぼれ鏡かな
風がわらふよ猫柳ひかるとき
春眠の夢の出口の自動ドア
地獄てふ酒場にぼつと朧の灯

真向ひて

武藤嘉子

春雪の明るさ明日も生きられる
露味噌の苦みまたよし世の樂し
真向ひて共に八十路の雛かな
麗はしき如月今を生かさされて
撒餌して良き知らせ待つ春の庭
葱の花過ぎたる日々の在り所

バター焦げ

林昭太郎

バター焦げにはかに春の近づきぬ
吊したる鉤を遠目に鮫鱈鍋
如月の耳の芯なる耳の骨

朧夜の地下深きよりエレベーター
虫ピンで止めてもみたき春の雲
五線譜に混み合ふ音符蝶の昼

花ミモザ

楠原幹子

さざ波に朝日子あそび寒明くる
隠れ棲むかにかたかごの一群落
春の虹声は言葉にならぬまま
古釘の支ふる涅槃図の嘆き
春の靄雑木山より繰り出せり
花ミモザひとりの紅茶肘ついて

ふくらんで

田所節子

剪定の傷口日ざし集めをり
出し昆布のふくらんである雨水かな
夕おぼろ文具売場の位置変はり
葺替への茅を整ふ鋏音
葺替へて屋根に日ざしのふくらめり
光るもの啞へて戻る親つばめ

マフラー撥ね上げて

荒井千佐代

いまさらに父母の亡きこと梅真白
姉癒えよちち植糸くれし白梅に

燕来て被爆地の空広がれり
潮溜りに稚魚の遊べる涅槃かな
父母の墓へ肩幅ほどの花菜道
われを鼓舞するマフラーを撥ね上げて

太陽の鱗 酒本八重

雪のあと知人のやうな陽を賜ふ
垣に積む雪の象形文字よむ
瞑りてゐても明るき雪の果
梅咲くや揺らして買へる籠豆腐
思うてもすぐ出ぬ語彙や鳥は巢に
荒鋤きの田へ太陽の鱗なす

前座 久染康子

竹馬の一步目壁が背中押す
雪折れの松の脂玉太りけり
富士山の前座に伊豆の山笑ふ
鳥帰るぽかんと沼の残りけり
草笛名人定評の無口なり
ミシン踏む影の微動や春障子

蓴菜池 望月晴美

柳絮とぶ前進の意志ありありと
啓蟄や周遊切符ポケットに
閉校と知つてゐる子の卒業歌
恋終へて隣の猫に戻りけり
春愁の菜箸少し長すぎし
残る鴨蓴菜池が好きらしき

桃の花 鈴木良戈

同齡の癒えし足取り桃の花
屋形船さゆれ蛤焼く煙
通し鴨ほろほろ遊ぶ朝の水脈
青年の言挙げたのし花ミモザ
良く笑ふ少女の皓齒花辛夷

いぬふぐり 大畑善昭

太陽の片目覗きの春吹雪
鴉よく鳴くはうが雄雪解風
いぬふぐり天ほがらかにあるばかり
囀や菩薩は千のみ手を伸べ
蝌蚪に聞かうか文明の千年後
狛犬に阿形吽形山笑ふ

潮鳴集

壺に耳 関根揺華

パンに耳壺に耳あり春愁
踏青の弾みをつけて自動ドア
陽炎の向かう師の国父の国
翻車魚のやうにたゆたふ春の雲
没個性憂ひて独活を晒しけり

春立ちぬ 石田 静

エルガーの愛の挨拶春立ちぬ
遠富士へ行つたり来たり半仙戯
きしきしと洗はれていく春甘藍
灯台の隠し切れない春入日
追憶の水より淡し柳絮舞ふ

謎々 菅原健一

春といふ語感眩しき便り受く
恋猫の声まねてみてはづかしく



人の世はややこしきもの蜷汁
春雪や夢にも重さあるを知る
愁ひといふ謎々もなき春真昼

主役 栗原公子

春来る補助線一本書き足して
朝寝する自由夜更しする自由
ままごとはみんなが主役つくしんぼ
春めくやミルフィーユのごと人住みて
音のなき二月の雨の光りをり

春風の席 富川 明子

春風の席あり回転木馬かな
リラ冷えや薬局にまだオブラート
工作の巣箱に小窓つけてあり
六年をあれよあれよと卒業す
山独活噛めば少年の香と思ふ

沖作品



能村研三選

風に芯残るなぞへの水仙花

図書館へ森の抜け道梅ふむ

満行を言祝ぐやケに牡丹雪

月光をこぼし檜皮の雪霽

梅二輪ほころぶ風にかたさかな

冬岬白波千千に咆哮す

春まぢか狭間より覗く城下町

開け放つ天守の扉鱗東風

幾山河越えて十勝野雪解風

かげろひて沖待ち船の宙に浮く

真つ直ぐに生きるを良しと筆の花

流水のぱつくり割れて海の青

行間に愛ある手紙雛の客

栄螺焼く匂ひ小上がり小座布団

梅の香や万葉人となる心地

市川市

高久 正

千葉

神戸やすを

千葉

岡 真紗子

市川市

埴 誠一郎

長野

植村 一雄

千葉

西村 渾

燕来る新市庁舎の設計図
春昼の都電ゆるりと曲り来る
藩校の文机低し余寒なほ
忘れ雪父子相伝の木彫像(持宝院)
風韻に乗る琴の音や寒牡丹
青空へ吹つ飛ぶ涙合格す
座にしばし舞台はねたる身の臍
鬚根びつしり水が好きですヒヤシンス
膏葉を剥がすたまゆら亀の鳴く
首すわる嬰へ万朶の花よ咲け
春風に乗つてみやうか渡し舟
古雛に転居の数を尋ねをり
門川の洗ひ場寂れ猫柳
風光る谷津田に戻る水の音
冬木の芽指したる空の青さかな

沖作品 15句選評

*
能村研三

風に芯残るなぞへの水仙花 高久 正

水仙の花は海岸近くに群生し、福井県の越前岬や静岡県伊豆の爪木崎、千葉県の鋸南町などが群生地として知られるが、いずれも真つ青な海を背景にした断崖に咲き誇る。この句は伊豆や房総などの気候の温暖な地域よりも、日本海の荒波が白く砕け散る越前海岸あたりを想像したい。山の斜面を下から吹き上げてくる風は限りなく冷たく、晴れた日には青い空、真つ青な海をバックに甘い香りの越前水仙が一面に咲き揃う。花は不思議なことに一様に海を向いて咲く。風の冷たさを「風に芯残る」と表現したのがうまい。

冬 岬 白波 千千に 咆哮す 神戸やすを

この句も前句と同様、冬の海を詠んだ句であるが、岬の岩場に

押し寄せる冬怒涛は凄まじい迫力で巖を打ちつける。海食によって海岸の岩肌が削られることもある。押し寄せ、砕け散り、泡立った白い波が、いくつも岩をのりこえてくる。咆哮とは「たけりさげぶこと。獣などのほえたけること」を言うが、冬は西高東低の気圧配置になり大陸方面からの西風や北風が強まるため海は波が高く大時化となることが多い。岩に激しく砕け散る白波は、寒さと相俟って見る者を不安にかきたてる。

流水のぼつくり割れて海の青 岡 真紗子

私も以前網走から船に乗って流水を見に行ったことがあったが、少し暖かくなった時だったので、ほんの欠片ほどの流水しか見ることが出来なかった。この句は流水の最盛期の迫力が伝わってくるスケールの大きな句である。天候にも恵まれ、快晴の空の青さと海の青さに、白く覆いつくされた海とのコントラストが美しい。

燕来る 新市庁舎の設計図 塙 誠一郎

私が長年勤めた市役所も老朽化と耐震対策をしなければならなかったため、新市庁舎を建設することになった。実に五十年ぶりのようなのだが、この度、その概要と設計図が広報に載った。塙さんはこの市役所にごく近くお住まいなので、この建設には特に関心をはらっているのだろう。「燕来る」という季語からも、新しい時代の市役所に期待しつつ、新市庁舎の落成を心待ちにしているのだ。(以下略)